

but

接続詞などの機能語も、その意味の程度や使い方に文化を反映することがある。今回は、この例を‘but’ vs.「しかし」で取り上げてみる。

まず、意味の程度についてである。古い文献になるが、中津燎子『Butとけれども考』(講談社, 1988)によれば、butは「反発が5分の4、ためらいが5分の1」であるのに対して、「けれども」はこの逆で「反発が5分の1、ためらいが5分の4」である。中津氏のいう「5分の1」とか「5分の4」という数値は実証的な結果ではないと思われるが、これはかなりな程度、当たっているのではないだろうか。確かに、butの場合は、前の発話の反対という意味をそのまま示していることが多い。それに対して日本語の「しかし」の場合は、ぼやかしたり、ためらいがちな口調になることが多い。これは、ものごとを論理的に断定することが多い英語国民と、心情的に訴えて「非断定」を好む日本人との相違と言えよう。

中津氏は人間をH(ハード)型とS(ソフト)型の2つに分けている。英語国民はH型で、日本人はS型である。これは「相対的に」とか「一般論として」という前置きをつけなければいけないが、氏の分類を筆者なりに敷衍すると、H型/S型は、対立/調和、理屈/情緒、饒舌/寡黙などの対比になる。いわば、英語国民は、ものごとの白黒、善悪、是非をできるだけはっきり表現する傾向にある。これが、butという対立の接続詞が、ほとんどの場合、文字通りその前の発話とは逆になることと連動する。ところが日本人は、そのような場合でも、できるだけ対立を避けたいがために、この逆接を断定的に使わないようにする。これは、‘Although ~, ….’に対峙する「~(である)が、…」の接続助詞の「が」の用法が必ずしも逆接にならないことも関係しているかもしれない。この「~が」は、「学校へ行ったが、授業はなかった」「彼女は若い^{ぶん}が、非常にしっかりしている」などのように逆接にも使われるが、前置きや時間的前後を表す場合も非常に多い。「次に予算の件ですが、今日中に決めます」とか「しば

らく見ていたが、ふっといなくなった」などのである。英語にもExcuse me, but where is the restroom?などの例があるが、この種のbutは極めて少ない。

次に、逆接の接続詞が使われる状況である。すでに拙著『単語の文化的意味—friendは「友だち」か』(三省堂, 2004)でモラルコードの違いの例として取り上げたのだが、アメリカ人の日本語学習者が、日本語の逆接を使った表現練習の例文「~のに…(である/でない)」が腑に落ちないと新聞に投書していた。その例文の1つは、「子どもたちは雨が降っているのに外で遊んでいる」である。投書氏によると、雨が降っていても外で遊ぶことがあるので、これは「~のに…」ではつながらない。つまり、It was raining, but the children were playing outside.にはならない、むしろ、It was raining, and the children were playing outside.の方が文として自然だという。そう言えば、欧米の人は多少の雨ならば傘をささずに歩いている場合が多い。

このように文化によって禁止事項は異なっているので、逆接の接続詞の使い方が異なる。上記の例に似た例は他にもある。たとえば、老人は派手な衣装を着ない日本では、「老人なのに派手な色のシャツを着ている」は成り立つが、老人は派手な服装をすることが多い英語圏では成り立たない。同じように、子どもはできるだけ早く大人の仲間入りをしてほしいと思う傾向がある英語圏では、「子どもなのに口出しをする」なども腑に落ちないかもしれない。このような例は、英語圏ではむしろ順接で結んで、As he is elderly, he wears a colored shirt. や She is a child, and yet she cuts in our conversation. などとなる可能性がある。

このように、機能語でさえも、その意味する程度や使い方は、それぞれの習慣や文化によって異ってくる。つまり、ことばと思考や習慣の間にはある程度の因果関係があるという「サビア=ウォーフの弱い仮説」は成立する。